

小児の誤飲防止の指導効果についての検討

(分担研究：小児の事故とその予防に関する研究)

山中 龍宏*

要約：わが国の乳幼児の事故の中では異物誤飲の占める割合が高く、諸外国と比較しその頻度は異常に高い。誤飲防止の指導として育児雑誌を利用し、口径が35mmとなる円筒を作成して乳児の口に入るものをチェックするよう指導した。2040名の乳幼児の母親に対しアンケート調査を行った結果、この記事を読んでいる母親は約80%であり、実際に円筒を作成したものは約20%であった。今後も、具体的な指導を行い、その効果を継続的に評価していく必要がある。

見出し語：不慮の事故、小児の事故、事故防止、誤飲、安全教育

はじめに

現在、0歳をのぞいた1-19歳の小児の死因の第1位は不慮の事故によるものであり、事故は小児の健康問題のうち最も重要なもののひとつである。

小児の事故は、小児の発達段階と密接に関連しており、年齢によって大きく異なっている。乳児の事故のうち、最も頻度が高いものは異物の誤飲である。生後5カ月を過ぎた頃から見られるようになり、その後約1年間は誤飲が多発する。

毎年、日本中毒情報センターから年報として中毒事故に関するデータが報告されているが、ここ5-6年間、その内容に変化は認められない。すなわち、小児の誤飲を防止する指導はほとんど行

われていない、あるいは指導されているとしても有効な方法ではないと思われる。

今回、乳幼児の誤飲防止のための指導法の一つとして、育児雑誌に記事を掲載し、その効果について検討した。

対象と方法

育児雑誌の特集として、平成7年12月号(発売開始は11月15日)に誤飲についての記事を掲載した。記事の内容としては、いつ頃から誤飲がはじまるか、月齢によって誤飲しやすい物質のリスト、誤飲したときの一般的な処置法、嘔吐させてはいけない物質などを中心に述べた。記事の最終ページの下段に、切りとって糊づけすると口

こどもの城 小児保健部 (Department of Child Health, National Children's
Castle)

径が35mmの円筒となるようなもの(図)を掲載し、円筒の作り方、ならびにこの円筒に入るものは赤ちゃんのまわりに置かないようにと指導した。今回、この円筒を誤飲防止スケール、あるいは危ないもの発見スケールと呼ぶこととした。

アンケートの基本情報として、保護者の年齢、児の月齢、性別、第何子か、住所についてたずねた。記事についての質問では、12月号を購入したかどうか、購入した場合にはこの記事を覚えていられるかどうか、さらに記事に従って紙を切り抜いて円筒を作成したか否かについて質問した。また、円筒を作らなかった人には、なぜ作らなかったのかその理由をたずね、作った人に対しては使いやすさについてたずねた。

対象としては、育児雑誌のモニターとして登録されている読者の中から無作為に、平成7年11月20日現在、生後3カ月から1歳2カ月の乳幼児を各月齢とも170名ずつ選び出した。次の号が出る前の調査が適当と考え、平成7年12月1日にアンケート用紙を送付し、回答の送付期限は12月20日までとした。今回は、12月末日までに回収されたものについて分析を行った。

結 果

アンケート送付数は2,040枚であり、回収数は1,614枚(79.1%)であった。記事の掲載されている12月号を購入した者は1,336名(82.8%)であった。誤飲防止スケールが記載された記事を記憶していた母親は1,074名(80.4%)であった。実際にスケールを作成したものは269名で、購入したもののうちの20.1%、記事を覚えているもののうちの25.0%であった。

スケールを実際に作成しなかった理由としては、作る時間がない、作ろうと忘れてしまった、気をつけているので作る必要はないと思った、まだ月齢が小さいので心配ないと思った、などであった。

スケールを作成した母親からは、実際に使用して役にたったという意見もあったが、紙のためすぐに破れて使用できなかった、子どもが口の中に入れてしまい壊れた、などの意見があった。

考 察

わが国において、小児の誤飲について継続的にデータを収集しているのは日本中毒情報センターだけである。

1994年4月から95年3月の1年間に、日本中毒情報センターが電話を受診した総件数は38,867件(単純計算で13.5分に1件)であった。そのうち0-4歳の中毒事故が83.8%を占め、1歳未満が11,525件、1-4歳が19,898件であった。0-4歳の電話による問い合わせは、92%が一般家庭からであり、事故発生から問い合わせまでの時間は、10分以内が44%、1時間以内が85%であった。摂取物質は1種類だけのことが多く、問い合わせ時に何らかの症状が認められたものは5-7%、物質や摂取量から判断して症状が出現する可能性がある場合は全体の13%であった。その内訳では、農薬が35%と最も高く、次いでアルコールなどであった。

誤飲した物質の中でいちばん多いのはタバコ、続いて医薬品、化粧品、洗剤、殺虫剤の順となっている。

これらのデータについて年報が出ているが、毎

年ほとんど変化はみられず、また乳児の誤飲の発生率は欧米に比較して異常に高いと報告されている¹⁾。

小児の事故防止活動を展開するにあたっては、

1) 頻度が高い事故、2) 重症度が高く、後遺症を残しやすい事故、3) 何らかの解決法がある事故から取り上げる必要がある。その意味では、有効な誤飲防止活動を展開する必要がある²⁾。

小児の誤飲の指導は、誤飲を前もって防止する指導と、誤飲したときの適切な処置の指導の2つに分けられる。処置の原則は、毒物を除去、あるいは体内吸収を減少させ、排泄を促進し、特異的な解毒剤、拮抗剤があればその投与を行い、バイタルサインを評価しつつ、その安定をはかることである。

防止の指導としては、乳幼児の全般的な危険性のチェックとして、乳児健診などを利用し、保護者に安全チェックシートを渡して記入してもらう方法がある³⁾。保護者は、自分達が住んでいる家や子どもの状況を考えつつ判断し、回答する時点で安全教育が行われるようになっていく。記入されたシートで特に注意すべき項目がわかり、具体的な事故の例をあげつつ指導できると考えていたが、誤飲に対する指導効果は十分ではないようである。

異物誤飲のために受診した症例では、誤飲したものの残りや、しばらく経って排泄されたものなどサンプルが得やすい。これらのものに、簡単な説明をつけて外来の待合室などに展示することも行われているが、その効果は不明である。

異物誤飲に対する防止活動として現在行われている指導内容としては、

1) 乳幼児期は、手にしたものは何でも口に持っていく時期である。

2) 畳や座卓の上など、高さが1メートル以下の場所に、

3) 口径35mm以下の大きさのものを置かない。

4) 部屋や身の回りのあと始末を心がける。

5) ジュースの缶を灰皿代わりに使ったり、コーラやドリンク剤のびんなど飲物の入っている容器に食品以外のものを入れない。

6) 灯油缶に使用する簡易ポンプは小児の手の届かないところに片づける。

などを保護者に伝えることが必要とされている。

今回、具体的に円筒を作成して乳幼児の口に入る大きさのものをチェックする指導を行った。デンマークや米国ではプラスチック製の円筒が作られ、乳児健診時に渡されている。プラスチック製のものを作成すると経費がかかるので、紙を切り抜いて作成する指導法を考えた。

今回対象とした育児雑誌は、乳児をもつ保護者を対象とした雑誌であり、各号とも30万部発売されている。調査対象が購読者という比較的意識が高い母親であると思われるが、記事の購読者の5人に一人の母親が、実際に紙を切りとり円筒を作成していた。この数値は、ある程度評価できる数値ではないかと考えている。誤飲防止スケールを作成する頻度を上昇させるためには、記載法などに検討する余地がある。今後、円筒を作らなかつた人と、作った人の子どもで、誤飲の発生率に差があるかどうかを検討する予定である。

今後、個別の事故を取り上げ、具体的に実行可能な防止対策を考え、実行する。その介入試験の結果を評価し、防止対策の有用性を検討する必要

がある。この作業を継続的に行っていくことが、有効な事故防止には不可欠と思われる。

文 献

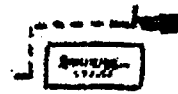
- 1)石沢淳子：中毒センターからみた小児の誤飲事故。日本小児科学会雑誌，98：1833-1836，1994.
- 2)山中龍宏：小児の事故防止へのアプローチ—オーストラリアのセーフティ・センターの活動に

ついて—。厚生省心身障害研究「地域・家庭環境の小児に対する影響等に関する研究」平成3年度研究報告書、p. 208-209, 1991.

- 3)山中龍宏・他：乳幼児の事故防止へのアプローチ—安全チェックシート使用の試み—。日本医事新報，No3521：30-34，1991.

図：育児雑誌に掲載した記事（一部分）のコピー。
ここでは実際の記事を拡大コピーして示した。

点線に沿って、ハサミでチョコチョコキと切り取ります。



クルリと丸めて、のりしろの幅にぴったりおさまるように反対側の端をはり付けます。



筒の直径が3.5cmになっていればOK。ここにすっぽり入っちゃうモノはキケンです。



▲これは米国製。デンマークでは同様のものを親に渡して指導しています。

切り取って作ろう!

危ないモノ発見スケール

左の作り方を参考にして、筒状のスケールを作ってください。筒の直径は、3.5cmになります。この筒の中に入ってしまうものは、誤って飲み込んでしまう危険があるので赤ちゃんの周りに置かないこと。でもこれはあくまでも目安。最終的には、ママの目でしっかり安全を確認してください。

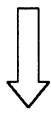
の
り
し
ろ





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:わが国の乳幼児の事故の中では異物誤飲の占める割合が高く、諸外国と比較しその頻度は異常に高い。誤飲防止の指導として育児雑誌を利用し、口径が 35mm となる円筒を作成して乳児の口に入るものをチェックするよう指導した。2040 名の乳幼児の母親に対しアンケート調査を行った結果、この記事を知っている母親は約 80%であり、実際に円筒を作成したものは約 20%であった。今後も、具体的な指導を行い、その効果を継続的に評価していく必要がある。